
黒の魔女

羽月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の魔女

【Zマーク】

Z5966Z

【作者名】

羽月

【あらすじ】

この世界では2種類の魔女があった。一方は褒め称えられる白の魔女。もう一方は、忌み嫌われる黒の魔女。忌み嫌われる黒魔女のお話。

カレー？（前書き）

思いつき小説です。

もひ、本当にここに乗せるのもおこがましいのですが、再び調子にのり投稿しました。

気分を害された方はすぐにまわれ右でお願いします。

こんな小説でもOKとこつ方はどうぞお楽しみ下さいませーーー！

カレー？

世の中にはいい魔女と悪い魔女がいるってしってる？
いい魔女っていうのは、みんなを助けて誰かの力になれる人。
悪い魔女っていうのは、みんなの優しさを利用する人。
でもね？見方を変えればいい魔女が悪い魔女に、悪い魔女がいい魔女に見えてしまうことがあるの。

「お前はいつまでこの街にいるつもりだい！－さつさと魔女の森へ
お帰り！！」

この街では私の素性がバレてしまつたらしい。
顔を見ると、そんな怒声が飛び交つてくる。
気づかれないようため息を着くと私は買つものもそこそこに街を
後にするしかなかつた。

黒の魔女 リーフア。

それが私。

この世界では黒の魔女と白の魔女が存在する。

そして、誰が決めたのか黒の魔女は人々に不幸をもたらす魔女とされ、白の魔女は人々に幸福を与える魔女とされていた。
かと言って、魔法を使えない人間にそれを見分けることなどはでき

ない。

いや、正確には魔女自身見分けなんてつかない。

生まれたときは皆白の魔女として生まれる。

そして、何かの基準でいきなり黒の魔女となることがある。

それは魔女がもつ魔力の色で判別される。

だから、昨日までは魔力を使うときに白い光をはなつていたはずなのに、今日はなぜか黒く光る魔力を放つよつるになると「いつ具合に」とかく言う私もその一人だ。

ある朝起きたらなぜか自分の魔力に違和感を覚え、試しに暖炉に火を付けるため火種をつくる魔法を作れば案の定自分の右手から発せられる魔力の色が真っ黒になつていた。

さすがにその時は私も愕然とした。

まさか、自分が黒の魔女になるなんて思つてもみなかつた。

そして、その日から私の人生はガラリと変わった。

「ただいま・・・」

『魔女の森』をつき誰かが言つていたその森こそ黒の魔女が唯一安全に暮らせる森である。

「おかえり〜！」

出迎えてくれたのは、じいじと一緒に暮らしている姉の様な存在のルーシー。

もちろん彼女も黒の魔女である。

「あれ？ リーファー元気ないね？ 何かあった？」

そう言つて頬ま紅でいた買い物を袋ごと渡す。

「あーーーもうつ！ リーファー！ じいじとはちみつ買い忘れてるじゃない！ あれがないとカレーが物足りなくなっちゃうでしょーーー！」

・・・・・なんていうんだろう。どつかで聞いたことのある隠し味のよつな・・・

なんて思つてているのは決して口に出さずに私はその隠し味に必要な材料を買って来れなかつた理由を伝える。

「・・・・・バレた・・・・・」

その一言でルーシーはわかつたらしく、眉を寄せる。

「・・・・・バレたつて、なんでまた」

先程までの明るさは一気に吹き飛ぶ。

「ん・・・・。わかんない。でも、バレてた」

見た目では決してわかるはずがないのにもかかわらずじつして、私たちの素性がバレることが良くある。

そうなつてしまつともう私たちはその街には入れない。

入つてもモノを売つてくれる店もなく食事すら取ることもできなく

なる。

「はあ・・・・。どうしていつもバレるのかしら。やっぱり白の魔女のせいなのかしらね」

ルーシーはため息を付きながら買つてきたじゅかいもと玉ねぎを取り出す。

「・・・・次はどこの街にする・・・・・?」

入れなくなつた街にいつまでもしがみついていてもしょうがない。バレてしまつたのならば、まだ誰も知らない街へと行けばいい話だ。

「そうね・・・・。この周辺はもうないから少し遠いけど、今度から東のアルバーナ国へ行きましょう」

ルーシーはそう言つと夕食の準備をするべく台所へと入つていった。

「・・・・アルバーナ国・・・・・」

その名前をきくのは一体何年ぶりだろ。

ふと、思い出される街の景色に思わず眉間に皺がよる。

「・・・・あんまり行きたくないな・・・・・

水の国アルバーナ国。

東の大陸でも3番目に大きい街である。

食料品はもちろん衣料品も雑貨も色々と揃つてあるこの街に今更行きたくないとも言えない。

どうか、行きたくないなど贅沢は行つていられない。

正体がバレてこうして行けなくなつた街はもう両手では数え切れない。

「・・・ま、私だつて分かる人は居ないだろうな・・・」

着ていたコートをかけるため自分の部屋へと戻ると、ルーシーが片付けてくれたであろうベットの上にきちんと部屋着が畳まれて置いてあつた。

「ん・・・、おひさまのにおい・・・」

その服を手にとり顔を近づけるとあたたかな日差しのにおいに心が落ち着く。

「・・・ついでに着替えよう」

着ていたものを豪快に脱ぎ捨て裸になる。

「dak~」ふおえいに「ひえ~」

術語を唱えると黒い煙のようなものに全身が包まれ天井へとその煙が消えていく。

「ふう~・・・、スッキリ」

体の汗や汚れを落とすのにわざわざ風呂へ行くのも面倒だった私は魔法を使い体を綺麗にする。

黒の魔女になつて唯一いいことがあつたのはこの魔力だった。

以前の白の時には、使えなかつた魔法も黒になつてから使える種類がかなり多くなつた。

「・・・それでも、この魔力に対する代償は大きい・・・よ」
綺麗になつた体に先程の服を身にまとえば、台所からいい匂いがして
きた。

ぐるわら

お腹は限界のよつだ。

そそくもと再び台所に戻れば、川レジーがちよこどもに盛り付けたカレーをテーブルに運んでいた。じるだつた。

「手云」

あまりのお腹の空き具合で、といひ思ひを済ませて食事にしたがつた。

「ありがとう！じゃあスプーンと飲み物をお願い！」

せつせとカレーを注ぎサラダを盛るルーシーの傍を通りスプーンを出した。

גַּתְּהַנְּגָן

術語を唱えるとコップが飛んできて勝手に飲み物を注ぐ。

「うひー！ リーファー！ そんなことに魔法を使わないー！ 料理はどんな料理も自分で作るから美味しいのよー！」

サラダを盛りながらぷりぷり怒るルーシーに口を尖らせながらもス

プーンをテーブルへと運んだ。

「・・・作つてないもん。注いだだけだもん・・・」

「ぱつりとつぶやいた言葉はしっかりとルーシーに聞こえていたらし
い。」

「もう！そんな屁理屈いわないの！？いい？魔法を使つことによつ
て私たちの居場所はどんどんなくなるんだからね！もうひとつと頃
重になりなさい。」

「・・・はいはい」

「フーファーーーー！」

ぐうううう

タイミングよくお腹の音がなつた。

「・・・お腹すいた」

がつくづくなだれるルーシーは頭を抱えながらひらひらと手を振る。

「もついいわ、食べちゃになさい・・・」

ルーシーの様子など気にもせず私はスプーンをもつてカレーを盛り
込んだ。

「・・・美味しい・・・けど、甘い・・・」

「んもうー。わがままいわなーのー。私は甘こまつが好きなんだもんー！」

「

「どうがわがままだ。

と、思つてもやはり作つてもひつた手前そんなこと言わすもくもくと食事を進めた。

「・・・もう、本当にアーフアはわかってるの？」

そんなことをブシブシ言つてゐるルーシーの声は聞かなかつた事にした。

ビル登場

朝から壊れそうな勢いで扉が叩かれ、まだ睡眠が足りていらない私は
イライラしながらも扉を開けた。

「つーファー……おまつ……どうこう事だよーなんでもまたばれてん
だよー！」

「…………」

バタンと締めれば再び激しくドアが叩かれる。

「おこ……いやんと説明しゆつて……」

「どうあっても、私の眠りを邪魔したいらしい。

「…………」

「つおつ……」

扉の外で唸り声を上げる声が聞こえた。

「これで静かに眠れる…………」

そもそも再びベットに潜り込むと、布団をルーシーに取
り上げられた。

いつの間に居たのか…………。

「…………」

ブルッと身體いをして、両手で血分を抱き込むよひベットの上で丸まる。

どうして、今朝はこんなに寒いんだろ？

「つーファー……あれどうにかしなさい……ひぬれこつたらいいのよ……」

朝から元気なルーシーに思わず耳をふさぐ。

「……カエルにした」

「……は？」

「……もう、カエルにしたから静か。……おやすみ」

ルーシーの手から布団を取り戻すと頭までかぶり就寝。かと思にきや再び布団がめくられる。

「つーファー……昨日もあれだけ魔法をむやみやたらに使つなつて言つたでしょ……今すぐ元にもどしなさい……」

もう……朝から散々だ。

ルーシーがキレると朝食がなくなつてしまつので、しぶしぶキレられる前に玄関に向かい扉を開ける。
ぴょんぴょんと跳ねるカエルが未だにそこにいた。

「えひえ「f」

するとぽんつと音が聞こえ、黒い煙が沸き立つた。

「リーファーーー！」

「「うぬせこ。あつちいけ」

しつしと手で払い扉を閉めようとすると、ガシリと扉を掘まれた。

「とにかく入れる。寒い」

そういうと勝手に部屋へと入つていく。
はあーっと溜息をつきながら私もしづしづ奴の後に続いた。

「ビルーーーうるせこーーもつと静かにしてよー近所迷惑じやない！」

部屋に入るなり今度はルーシーの怒鳴り声が聞こえる。
朝っぱらからなんでこの2人はこんなに元気なんだろう。
そんな事を考えながら、私は再び自分の部屋へ戻ろうとした。
が、ビルに腕を捕まえられた。

「わりいわりい。だつて、またバレタつて聞いて、いてもたつても
いらんなくてさ。…リーファー、逃げんなよ」

前半はルーシーに、後半は私に話しかけている。
逃げるなつて言つたつて、腕を掴まっていたら逃げようがない。
とにかく、私は眠いんだ。
どうして、こんな朝早くから起きなきやいけないんだ。
じりりとビルを見上げるがビルはニヤリと笑つてこちらを見ていた。

「『言つとくけど、もう一〇時だ。朝早いなんて時間じゃねーぞ?』

・・・私にはまだ朝早い時間だ。

「せうよ、ワーファーいに加減起きなさい。ほり、すげに朝」はん用意するから」

そういわれ、しぶしぶ食卓につく。

「・・・で、なんでばれたんだよ」

「知らない」

「は？ 知らないって、お前まだどっかで魔法つかつたんじゃねーのかよ？」

「使ってない」

「なら、なんでバーンんだ？ 田のやつは余ったとか？」

「会つてない」

「・・おかしいなあ。お前、前もそんなんじやなかつたか?」

〔 1 〕

「誰かにぬき買つてんじゃねーの?」

「…………今、あんたを悩んでる

「・・・・なんでだよ」

「うぬれこ。とにかく、うぬれこ」

両手で耳をふるぐ。

二つの間にかわやつかり隣りに座つてこるのもめんどくれこ。

「はいはい、あんたたち朝から仲いいわね。ほら、朝食よ。もひりんな時間だし、お昼はんも一緒にいいわよね?」

どんと皿の前に美味しそうな食事が運ばれてきた。

「いただきまー!」

一口パンをかじると田が覚める。

「ほんと、食事のときだけは生き生きしてゐるわね」

くすくすと笑いながらルーシーは再び厕所へと戻つていった。

「・・・なあ、今度はどこに行くんだよ」

隣りで肘をついてこちらを見てこるルーシーがつとめつめた。

「ん、もうもうもうもう」

「そつか、アルバーナか・・・」

・・・わかつたのか。

口こつぱいに食事をほおりじとてゐる私の言葉がわかるとは・・・。

「ちよつと遠いから、一緒にに行つてやれないな・・・」

ぼそぼそと何やら独り言を言つてゐるようだ。

まあ、アルバーナは歩いていくには遠いしね。

私たち魔女には魔法があるから距離なんて関係ないけど、男に魔力はない。

そもそも、黒の魔女は恥み嫌われているのにもかかわらずビルがここに一緒にすんでいることが間違つてゐる。

でも、ビルは幼いころに両親から捨てられ、今のビルのママ（黒の魔女）に拾われ育てられた為か、私たちを嫌う人間や白の魔女を憎んでゐる。

いくら、元のあるべき場所へ帰れとビルのママが諭しても全く言つ事をきかず、ずっとここに住んでゐるのだ。

「だいひょうぶ・・・。びるがいたひょうがじやま

もぐもぐと口に入った状態でビルに返事をすると、ビルも困つたようにな笑う。

「邪魔つてひでーな」

ビルは私の頭に手を載せぐしゃぐしゃつと髪を搔き乱した。

「じゃ、また後で来るからそれまでに着替えとけよ」

やつぱり、ビルは足早に我が家を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5966z/>

黒の魔女

2011年12月20日19時47分発行